

隅田川散歩 (一) 岩淵水門

長尾 進一郎

実家に近いJR赤羽駅から北へ一五分ほど歩くと、東京・埼玉県境の荒川に出る。山梨・埼玉・長野の三県にまたがる甲武信ヶ岳を源流とする全長一七三キロメートルの荒川は、このあたりまで来ると川幅は二百メートル近く、河川敷も広々としてゆったりと流れている。荒川に架かる東北本線の鉄橋の一キロメートルほど下流に、青色のゲートの岩淵水門が設けられており、そこが隅田川の起点である。隅田川はこの水門で荒川と分かれ、東京の東部低地を北・足立・荒川・墨田・台東・中央・江東の七区と接して東京湾へ注ぐ、全長二三・五キロメートルの一級河川である。

現在の隅田川は、大正期以前は荒川本流の下流部であった。この流域では江戸時代から頻りに洪水に見舞われていたが、明治に入り住居や工場が立ち並ぶようになると、洪水被害は一層深刻となった。特に明治四三年の洪水は甚大な被害をもたらし、荒川は抜本的な治水対策を迫られた。このため荒川のバイパスとして、東側に二二キロメートルの人工河川である荒川放水路が計画され、明治四四年から二〇年の歳月をかけて昭和五年に完成した。工事で移転を余儀なくされた住戸は千三百世帯にのぼる。荒川放水路と共に岩淵水門が作られ、上流からの水量の二割程度を水門から荒川へ分流し、残りを放水路へ直通させる分岐点となった。この工事の洪水抑制効果は大きく、岩淵水門直下における荒川の水位は三メートル近く下がったと言われている。その後昭和四〇年に川の名称が変更され、荒川放水路が荒川に、岩淵水門より下流の荒川は隅田川となった。それ以前にも荒川の下流部などで隅田川の通称が使われていたが、正式名となったのはこの時である。

秋晴れの一日、岩淵水門を出発し、何回かに分けて隅田川沿いに下流を目指すことにした。水門を出てすぐに新河岸川と合流、しばらくは荒川の右岸に寄り添って流れるが、数百メートル行ったところで隅田川は右に曲がって離れて行く。(つづく)